

光島貴之 講演会

「芸術家にとって創作はセラピーか」

—ぼくは創作活動で生活の危機を乗り越えてきた

2014年

12月15日(月) 18:00-19:30

甲南大学18号館3階講演室

申し込み不要
参加費無料

講師 光島貴之 (美術家、鍼灸師)

司会 服部正 (甲南大学文学部准教授)

光島貴之さん(みつしま・たかゆき 1954～)は、国内外の展覧会やワークショップなどで活躍中の全盲の美術家です。光島さんが本格的に創作活動に取り組むようになるのは、40代にさしかかる1990年代中頃のことでした。

全盲の光島さんが、敢えて視覚芸術と呼ばれる絵画や彫刻に取り組もうと考えるようになったきっかけは何だったのでしょうか。触覚で鑑賞する視覚芸術の創作に精力的に取り組むということは、視覚に頼らない生活を続けてきた光島さんにとって、どのような意味をもつのでしょうか。

この講演会では、光島さんご自身が視覚障がいとどう向き合い、そこに創作活動がどのような影響を与えたのかという観点から、一人の芸術家の生活史を語っていただきます。それは、アーティストが自作の意味を芸術論として語るという性質の講演会とは異なり、創作活動とセラピーの関係について考えるうえでの貴重な証言となることでしょう。



甲南大学ギャラリー・パンセでの個展「さわるためにだけ存在するものがあったもい」(2013年) 展示風景

主催：甲南アーツ&セラピー研究会 kaatsg@live.jp

本講演会は JSPS 科学研究費助成事業 (課題番号 25284046) 「芸術学と芸術療法の 共有基盤形成に向けた学際的研究」(代表：川田都樹子) の助成を受けたものです。



協力：甲南大学人間科学研究所

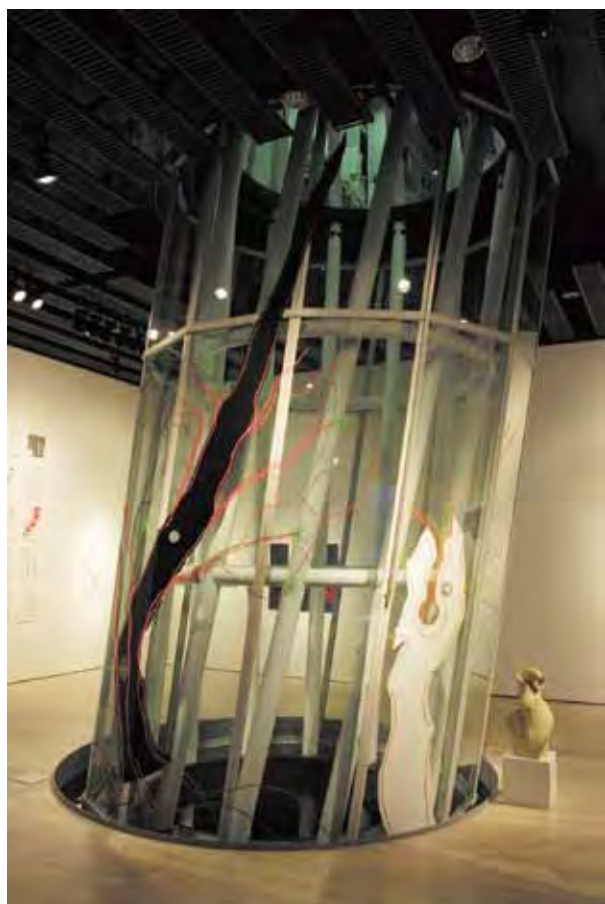
〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8 丁目 9 番 1 号 Tel/Fax 078-435-2683
E-mail kihs@center.konan-u.ac.jp URL <http://kihs-konan-univ.org>

光島貴之 講演会

「芸術家にとって創作はセラピーか」

—ぼくは創作活動で生活の危機を乗り越えてきた

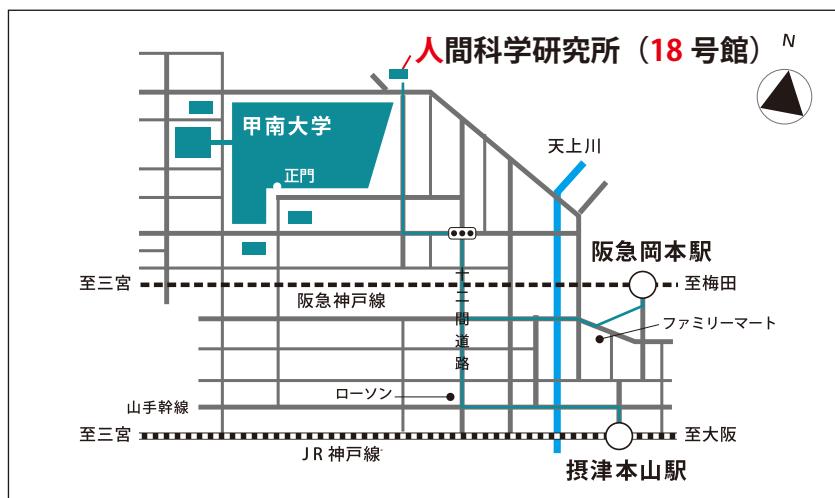
2014年12月15日(月) 18:00-19:30 甲南大学18号館3階講演室



光島貴之 (みつしま・たかゆき) 略歴

- 1954年 京都市に生まれる（先天性緑内障のため、幼時期の視力は0.02程度。10才頃失明）
- 1976年 京都府立盲学校理療科卒業、大谷大学哲学科入学
- 1982年 現在の鍼灸院を開業
- 1987年 野外彫刻など、触れる美術を求めて鑑賞を始める
- 1992年 陶芸家・西村陽平のワークショップに参加し、粘土造形を始める
- 1995年 「触る絵画」の制作を始める、ギャラリーTOM（東京・渋谷区）のグループ展に参加し、以後、本格的な作家活動を開始する
現在まで国内外のグループ展への参加約80回
- 1998年 初個展をギャラリーはねうさぎ（京都市）で開催する
以後、現在まで国内外の美術館や画廊などで個展を25回以上開催
- 1998年 東北芸術工科大学でワークショップ「手で見るかたち」を実施する
以後、大学や美術館など各地で50回以上のワークショップを企画・開催する
- 2002年 対話しながら絵を鑑賞するグループ「ミュージアム・アクセス・ビュー」の結成に参加
- 2013年 甲南大学ギャラリー・パンセにて、個展「さわるためにだけ存在するものがあるかもしれない」を開催

パブリックコレクション：府中市美術館、兵庫県立美術館



上：ワークショップ中の光島貴之（2013年）

中：光島貴之《ガラス柱の木》2002年、せんだいメディアテーク

下：光島貴之「みる／さわる だけではわからない、かもしれない」展
会場風景、2013年、MATSUO MEGUMI + VOICE GALLERY pfs/w

- ・阪急神戸線岡本駅またはJR神戸線摂津本山駅下車、北西へ徒歩約10分。
- ・会場には駐車場がありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。